

学位論文題名

日本語名詞節主題文の研究

— 成分型関係名詞節主題文を中心に —

学位論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の名詞節主題文を構文論的に解明したものである。「AはBだ(である)」に於いてAを名詞とする主題構文の研究は、従来も助詞「は」の研究に始まって盛んに行われて来たが、本論文ではAの部分(主題)に「父の血を受け継いだのは姉のほうである」(阿刀田高『面影橋』)の如く、「従属節(連体修飾節)+の」という名詞節を持つ構文を取り上げ、Bの部分(述部)はAの従属節の中の成分として分析できるので、この構文を「成分型関係名詞節主題文」と名づけ、「BがAだ(である)」(上記の例文では「姉のほうが父の血を受け継いだ」という普通構文との対応を考察し、成分型関係名詞節主題文の統語構造、成立条件及び形成のメカニズム、更に此の構文に関わる諸問題の検討によって、主題構文に対する全面的分析・記述を目指している。

その論文の構成は、以下の通りである。

- | | |
|----------------------|------------------|
| 第1章 序論 | 5、おわりに |
| 1、研究のテーマ | 第4章 非格成分型 |
| 2、研究史の概観 | 1、はじめに |
| 3、本論文の構想 | 2、非格名詞型 |
| 4、研究の立場と方法 | 3、副詞型 |
| 5、本論文の構成 | 4、副詞節型 |
| 第1章注 | 5、形容詞型 |
| 第2章 成分型関係名詞節主題文とその周辺 | 6、連用修飾語の種類 |
| 1、はじめに | 7、非格成文型の性格 |
| 2、名詞節主題文の分類 | 8、おわりに |
| 3、成分型関係名詞節主題文 | 第4章注 |
| 4、用言型関係名詞節主題文 | 第5章 間接成分型 |
| 5、名詞型同格名詞節主題文 | 1、はじめに |
| 6、用言型同格名詞節主題文 | 2、ノ格名詞型 |
| 7、不完全型の成分型関係名詞節主題文 | 3、被修飾名詞型 |
| 8、形式名詞「の」について | 4、内包節成分型 |
| 9、おわりに | 5、おわりに |
| 第3章 格成分型 | 第5章注 |
| 1、はじめに | 第6章 二項目成分型 |
| 2、各種の格成分型 | 1、はじめに |
| 3、格助詞の無形化と格成分の類型 | 2、「Y + Z + X」構造型 |
| 4、格助詞の無形化に影響する要因 | 3、「Z / Y + X」構造型 |

- 4、「YガZデX」構造型
- 5、二項目成分型と一項目成分型の関係
- 6、おわりに

第6章注

第7章 成分型関係名詞節主題文の形成

- 1、はじめに
- 2、従来の解釈とその問題点
- 3、新しい提案

- 4、成分型ノガ構文と総記性の「が」
- 5、いわゆるウナギ文の形成について
- 6、おわりに

第7章注

第8章 結語

- 1、本論文の総括
 - 2、今後の課題
- 参考文献

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 石 塚 晴 通
副 査 教 授 葛 西 清 蔵
副 査 教 授 宮 澤 俊 雅
副 査 助 教 授 佐 藤 知 己

学 位 論 文 題 名

日本語名詞節主題文の研究

— 成分型関係名詞節主題文を中心に —

第1章では、本論文の目的、研究史の概観、研究の立場と方法、本論文の構成等、序論として必要なことが手際良く記述されている。

第2章では、実際の用例をもとに名詞節主題文を4つに分類し、名詞節主題文全体の中での「成分型関係名詞節主題文」の構造的特徴が記述されている。形式名詞「の」を構文論的に解明し、従来「もの」・「ひと」・「こと」に相当すると関連づけられていた見解を否定し、前後の要素の指定を受けている一種の従属節標識に過ぎないとする新見を出している。

第3章～第6章で、4つに分類した成分型関係名詞節主題文の成立条件が実際の用例に基づいて検討されている。第3章では、ヲ格・ニ格・ト格・デ格・時格・ヘ格・マデ格・ヨリ格等の格成分型、第4章では、非格名詞・副詞・副詞節・形容詞等に非格成分型の成立条件が検討され、関連して従来の連用修飾語の分類に「時相修飾成分」を加える新見を出している。第5章では、述部の要素と主題の従属節の術語との間に、統語上直接関係のない、ノ格名詞型・被修飾名詞型・主題の従属節に内包された従属節の中の要素である内包節成分型等の間接成分型の成立条件が検討され、主題と述部とに置く概念の大小、被修飾名詞型と内包節成分型に於ける語彙選択の有効性について、新たに全体的記述が成されている。第6章では「XはYがZ」という二項目成分型の成立条件が検討され、更に一項目成分型との関係を見ることにより、二項目成分型の形成のメカニズムを解明している。この型を構文論的に分析したのは論者が初めてである。

第7章では、二項目成分型の分析を踏まえて「は」の働きが新たに解明され、成分型関係名詞節主題文の形成に統一的解釈が与えられている。また此の解釈によって、「うなぎ文」の形成、総記性の「が」の由来にも新見が出されている。

第8章では、本論文の総括と今後の課題とが簡潔に述べられている。

以上、論者が成分型関係名詞節主題文と名づけた構文を、実用例を豊富に集めて丹念に

分析することにより、多くの研究者より関心の持たれている名詞節主題文を統一的に解明する手掛かりが得られ、関連して得られた新見も少なくない。また用例の収集と共に、非文の判定等にアンケート調査を周到にしている堅実な手法も評価し得る。反面、実用例の分析を主とした為に用例は無いもののモデルとしては考え得る構文の考察に欠ける面があり、また主題部に比して述部の解明が手薄であることは否めず、これらは今後の課題となろうが、審査委員会としては総合的に評価して、本論文は課程博士（文学）を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。